[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

そもそもこのいつてんしのなれる
新宮の事をあるの一稿とする
なつて行くものである

白穂

白猿狂歌集

元日　おのれ　貞柳

うけとれはまくらくらしく別より　曉はうりよき物ハ形し
苔もまもらるゐ庭ちにおのつゝ毛年き花の妻ハきまろ

比丘尼の海あ河よ

上下の麻ちつゝふりくきらら来る世代の妻れ中ろ

保川木場ち住ろ江門弟物三ろ世ろ寺ろ
うゝみ餅祝物のとろれ

妻もきつねのひもまでゝ引ちハ子代の渡ちつきたるあん

元日市村屋蕎麦ちく

浅尾　岩井　三升
あきたちせりとのみ祝いたひるあとちあやくゝまん

浅川　訥子

この時四位せうせんの遊女菊の屋の十郎
第十郎もかりうの男子郎といひける
門の暖簾よりこそ松茸こうちまつる
ちやうんせのふとりこそ市村屋
舞鶴こうこそ
美物は礼者の新もまやう松竹こそこのしやんせの
寅のとし
ぬるまこそ街道一の寅はとしもかうこう神は君
小松川
京侍ふ祝ふこそ二十余孫ふこそ常磐の長の小松川
としのたしめる
梅咲くこそ常きかくこそ我夜ふきかりてこそ女の五

白梅　一

むの女ちるこのりたはこそ紫色の少神
紙くきしこれはよある
夷の野ふのむこさきはかりこそ長ちやの利あげ倶ちあ
みちのくはかくせちくきこひとちんけ
初午
どんどとかぶ美くこせのまきはだち刑生なる神の初午
梅
ちるさくめくきりは紙梅花まこそこのほあやはちき
幸四郎まとりこそまは戌はこそ歓せこそ
梅一樹たこまつこそ演成ちこそ
花さこそ大意大悲の御はあ妻風よけよのはは座せ
鼻はたこは釈ちこそ我こそこの唄の

[illegible]屋のさくをへて
[illegible]毎年[illegible]様よりそもまた秋の中つの花を有る
彼岸花へ月中車[illegible]
のつくつくきよたひまれへび秋仁つ出出来人がいやる

妻雨

妻雨れくやれ花夫[illegible]くとも草のいほりの秋ころハよし
海生のたりめ芋新氷りとともむつよよれつて
あれいそのきよやしつとも秋でのあり
るかる桃さくのさうくもへぶそいる
[illegible]ちとおもとおもく
世中ハたつつ樹花つるの九そ小ま坂東ひつこまねしハ

秋歌

[illegible]きよれ芋のいほりのたの六酒也一杯有あけの月
人くと月とうに附加古川お義のんかく
牡丹よあといひれハ
月うんと雨ケたつせすよ春る今ち月のやくよまうく遊戯

月

三百月よいてびんあ[illegible]こよひを知る男ちる
後の月ケよ
十三歌人ちかくケ有さ[illegible]ぶ芋をこ[illegible]たわで芋ケ名月
芋一世てなの名ケ牡言ケ[illegible]の日中村
芋義ら輪坊ふしいの知よ[illegible]ち指歌
賀ケて
師走[illegible]ぶよりやぬ芋ケ[illegible]ぶ芋ケ五月ケ輪坊芋ケ評も上義

日新法師老八月舞ときめぬさそれ程
言よ山姫の化身のちゝ母樂屋へくんと
する村園寺帰らしらかけ松やうて
ゆう花の柳いとゝくさ松やういとゝ辰のとき
暮春
夜ゆまつ炬燵よ足をのべの秋めはうう出てくれとゝ
五十五年ちゝくるとしまれて
ゝゝゝ下ゝゝもよもむ五十又年四又実義よい年ゝ
春雨
山王丸山の橋も何ゝせんゝきゝ松ゝちの君のたゝみ
初恋ゝゝうゝと
いつくゝもいとぬがまるめてもゝゝせゝゝですれ夫初の新

寄八十八夜恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

極楽[illegible]

中嶋勘左衛門死せる時

やうれよるものの鳥成歌[illegible]

[illegible]小六一周忌

秋さぶるまぬ花の一ゆゑ

[illegible]

[illegible]人の[illegible]

たのしふ[illegible]秋の月夫婦[illegible]

題[illegible]

御法事ちかくなれば我立ちまゐるべきあるべしや
むつの島といふこゝろにて宿杜若のうた
老ぬるなれば行くすゑ
我ゝ者ハ都住よりの長已ゝ牛馬と人ハいつぞり
関屋
世とすてゝ友たち多くちかうよりて月雪花山ほとゝぎす
市村ゆきたとあるゝ川幕ゝ小ゝる
くゝれくゝるくゝ
はるいきれ島くはくゝまや町ゝくゝ有今財もあり
はなれ狂言なのたゝ平記ちれハ形
四時をゝふくとゝすゝて
三ゝらいばくゝとゝいもてゝるゝやゝ生死流転のゆかりして

白樺 四

輝牛ゝいくゝ人人鯉のあつもれたくゝんとひ
ゝ出りゝ後ゝ生きあゝ小と伝ゝ
きれゝ大里西七五郎ゝ行くゝよゝて老ゝる
二ゝ牛の角ゝ牛ゝちゝびくゝあゝひゝ我ハ兵人
伝ゝ者ゝくゝのちよゝ
数世代月代制ゝあゝひゝふゝ不滅の佛ゝ
小風ゝ行ゝれゝ病ゝ者ゝ南風張ゝ
所痛ゝゝ牛ゝ風ゝ牛ゝ
雪風ゝあゝきゝ
食ゝすゝたゝこゝ
北ゝ西ゝ南ハ所痛ゝ風ゝ雪ゝ
須彌山ゝゝ牛ゝ父の恩ハ

の多病なりけるをかしき

三井寺定九郎の役をつとめける時 奈良
大人よりしちまきしてつほし女の太刀より
むかしも歌仁のたまはれたるをよしやしこしあはし
りるかりてる

鉄炮の玉れひびきまたたる八入ゑてうちの玉のてんまちもなし

吉田幸哲老の太刀へ

無きの八丈も心人ときけば本振る出まして浮世に陸ありまさ事ハ

胸中不可止一物

死ねて後ちつくみおちうらんめがやまるもしらぬ苦労なりけり

平か判の狂言合に初花の言をほめるぬき
書きて侍るに之つるてまゆるつ後のうさ侍るべくり

ぐるしつそ此中へは此言はかる声たくるるそ
初花ゆゑしにあやる初鰹時なえんどひなくしさけ能
あま人そらひわ出形りとて瀰猫を打まりうまに
直ゆきけハすこしたるめのうちあれ六わそうとまけてはしひかや

京都築山町猪の下を焚きみる絵に

てるうや火のわきまきと侍けるしまうとてハ文猪かたりた

唐土よりも富士よりてる高き山ハあれなと人の言ふに
秋きりて

もろこしの五岳と富士は貧川よりさきつ中秋つまき合せ

いせのさかけよあさうつたそてしよ物もらひ

京家此ふかけよ世に何さかつハあまつひつきのよひたそとく

平か家清のいでたちせる絵此扇に

右幕下氏はこの頃自たまりてそなはれる位牌所也
大王殿より後深草寿院へ慶子が参たる成雅
波人々たりこゝにて参会せられこれ作
恵方よりの手まる後の神風や白い小梅のあたりもあれ
布袋より
金山寺にをりたる人の楽八如来にて祈りこう
子日のあてはまる人の社にはこの法にて
人々丑の日の三升引といふ題出
和歌よみこゝる
さうこの三升よりあるはひいき八一番ろ氏耳小歯遠
芋屋より桃さくハなりれとも門人ハ新車
中車あり

二輌ものゝ女はこゝる車ものゝ高八百里より丹波
外郎ゝの後より
菊桐の法役は敬免あるは遠八寺分自慢の後より南人
題出
み編地より世編地ようよう西ハとも遠風いと
院相日頃参寵給ふ
悲人の為ものゝ流とて繁昌ある小八
所縁の後より
あれものの子ん宗宮おみの為の後人れ歩ものの愛 初
扇より知のきてよと黒山秀蔵ものゝ
出ゝくハものれ様てゝ子ものの森れ 牡言
高御師の扇面

こてバひくくもくハ風ゝ身ゝ梅の木ゝ梅ハ木力
三ツ井ゝ絃の音呼島の教（これをいつむのこと　文徒学ものこと）
身のほとハ浄ゝ水ゝ風風風ハまれ花ゝ花ゝ
三ツ井ゝ猿猴の月ゝ絃ゝ
ゝとゝゝも及ぬゝ多きゝすゝんの浦き身ゝ
三ツ井ゝ製ゝ関扇のたゝ給ゝ
仁ゝ義ゝ勇ゝ人ハ未ゝ世ゝ界ゝ絃ゝ
三ツ井ゝ絃ゝ
世の中の釈ゝ人ハ初ゝ
ゝ河原ゝ
ゝ絃
なゝきゝ遠ゝ永久橋のゝ代
無ゝ絃ゝ

素ゝ松のゝ
金看板安丹郎
東音次ゝ
かゝ
ゝ大風ゝ郎ゝ
ゝ人のゝ坂
ゝ川のゝ男一足
ゝ人の
ゝ人のゝ
ゝ小ゝ
ゝ畑の
ゝ
武者ゝ
鬼の
ゝ絃の衣の袖ゝ

今が生死を定め給ふの声きけハまなるのもきハ〳〵く
甲府なる亀屋といふる芝居大ひなる元ハ
あるゝき人のゝれゝら不二ゆたるくきある甲斐ハ三ゝ
月
物〳〵の九きお国〳〵四角なる三井の役ハれたれいゝハ
袋物子よいたゝるゝけゝゝとゝいつもれ出ゝく
人毋ほこるゝりゝ行る紙見ゝて
地震
て花ゝこゝゝほとのてもあハぎんまゝゝれゝけ欲ハけれ
福角の芝居無昌なるゝれを
こゝゝまゝ花ゝくゝきにゝ一ゝるハゝび稲ゝまゝり
多ゝをなけゝゝ人毋よみてゝ
まゝゝ八食きまゝにゝるゝよゝまゝゝてゝまゝゝゝつゝき

本所ゝ六河原作者ゝ甘納すゝ
ゝくなゝゝゝもゝゝゝきすゝるゝゝゝんゝまれおゝきゝ
八月の江人のゝゝゝゝ寺院の千躰佛ゝゝゝ地
ゝゝゝゝ
南岳大慈大ゝの新世者ゝゝゝゝゝ月のみ法
飛おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝまゝゝ船界ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
三月七日赤良大人の母五の六十賀よゝゝ
ゝゝ寺
ゝゝゝ小松ゝ杖法ゝゝ盤七九六十三月七日

亀屋喜翁判菱すしさして

玉菱のたけなる松のささやきをきけば千年 亀屋晩年

一世て度の名ならし狂言あるく

身のほど我身三升九えひ小ハ腰かゞめてひざア近づかり

くつろぐふハおそろしきこゝろよき共ぬきかりそくらう衣装

とりまる時ちりなき世の中れ花も花なれ鼻も鼻形れ

女子のりよく出しかるみの事よ

よあゆしくおもひなうらも筆くせうようおつみてやる歌人又

都にてあつまる俳優の人く平らかれ家

などとひきてうなる時

隅田川あるや名しやのゆび住居都の人たちあるをうらし

俳優者やあ増よある

顆紅粉のつきも桃掛て我影の白くなりしたなるまなば

粒に爰米のあるし人にまさつ小さらまりて

きあうくれせらりふよりふ物きるとよし おほし

こひなるよ

一枚てかんかん五粒おはれせぬ娘かきの重に花大当

酒とやむるとく

三升ま酒我あつて売らうハさうざ餅ある名をやたてあん

もくはなくなるらふ頃ハまさとさのなあうくも

あるきくいむてなうる

世のなかの口いる身のもつこうしなくらけなくも若をきぬめく

黄餅よ寄て出かころさとよある

黄餅とおほしんのしんしのこあまの売まされ名をと中て寄やよ

三尺菴より日蓮のうきたるひしまんだら
をうつして山ぶちぐひもひのまんなをうつすとをりられば
あらうとき高祖日蓮聖人の自筆をちらひもんのまんだら
行者人寺の祖父相造のうきしに一軸をおさまりて
正筆なるハきいめ書をせるといひられハ
市川水流れて来るうりこせのむうりくの祖父うこうきき

白梅發句集　四季混雜次才不同

元日やこゝに曙いさなはいくら
あれ飛ふ雑煮のさゝれこゝ行
七草やロにふくまのまたうま
とゝ酒やきうも相れ生えなう
筆筆ハきうもうの雑を夫
筆筆や觀世をまゝはうん
世界のうれ牛蒡といふ所
すこかりあるあるあ乗
たるうとをもうもくこもあ草草ぶ
ぶきうう風彩柳のまつうけ

手ら大おく梅の白て仰ハ
ゝと梅のつまゝ[illegible]
これよりとつきて

梅紙ゝ

松葉ほう萩茎ほうの玄孫ぶ
出ゝうゝや世ゝる人たまハ[illegible]
えひ義七義花見の世てハ七夫妻つ
新角力 時ゝて桃花のせもえ系
馬亭馬馬ハ受信の和命出と
きゝて中米をゝる
いゝもゝ[illegible]
鞦韆いゝ圓ゝ[illegible]

石川の[illegible]
大佛紙[illegible]
大佛の出生あ[illegible]
樞ハ玉[illegible]
鬢斗ハ團十郎[illegible]
の墓とゝ[illegible]

衣食住[illegible]
あゝ[illegible]
[illegible]亭主ハ[illegible]
牛[illegible]
[illegible]
五十の年[illegible]

露しりや踏んて捨る　老か縄

古人坂東彦三郎ハ閑居を日本橋の
かれかしこに番なる山吹の花咲けれは
飛脚法師のしるしに番てし桜をそへて
たまはりしに袖をぬらしれさたりしを歌
ありしみたりしるしやなきさんと　其
道法師かよりなかと折りくれて

山吹の枝しつかなくよしや　袖の為

猿ひきてよきさるほとの手に持ちて
この人のやうたりしれに守て　路考の
るかれきするのさくあるを見て

附かれ　俳舞書や　花乃　雪

かしこに住る男女のこゝろをとりて
ありしかの様をまたに出なく諷ひて
あきたきぬむすひてあつるにもせぬ
蝶となるてふきもの　蜘蛛
卯の花も此の端に　来く様し
所人嗜まて志なきて
あまきさし上手下手ありせられ声
よし形　樹をれもほとりに蝉のこゑ

矢の根五郎乃縁の類
芝は百行の基萬善の源也
著名これも形になとならし　五月雨
甲府本の俳諧の席なく

のうの新出られて
うつくしき菩薩はうつくしの社新
あまの酒や集社新まつる不可多
民のうつくしかはゆくハ
あきさくら社金無く出し　故やうれ
甲斐の人くに市う駒六ようたたし
きあ家新まあく七月集とうあられ
爲れもうも江戸世やや初茄子
初松奥秋迦うう先く生れうう
うもう又七月よううやうつ松奥
ううまうと爲まくあうに大吾十町う
のううう新とりちうれ

白樣　十三

すみ無共も初秋く役者ハ
筍や老子孔子も古つ奥
くさうの配くあとくう茶
南山の四皓社絵う
世や冷く先生二人公二人
孟自や一竿釣のちかき
賀くさ社うも咲うう小袖
秋の中まうハね早社いさ世秋
七日西ふうれハ
七夕や今生ふのくされ縁
あくさうの姫も今佛や盆社月
彼遠くう森の野ますあう新う

秋風のふくにつけても要し
まづ見まして待りて
蜩や日暮りなのし物はそれ
甲府くり物く境とり出る友
とちのえくいひ出る
弥生と出て俤しや錦のきりくれ
先祖乃言名ハ我乃ちかけはち
和歌によむハ海にあしれきりくす
詠ハ見しねるにハもとまき秋哉
手路乃質来も豊年のうきちて下
世まうす中に取さる葉山ふうな
蝦町の南側あるなくまりうち御

住くるに燐ぬに似るかる人の偶
くちきかりまきさきのもる
秋中のく
ち町のあなう海くやれち月
名月やまなし萩に秋もあり
秋もあり子はほりちりにゆる
稲荷山
草かりやあつま男に京女郎
夕暮れむしろ母猪るあつさか
蕣や細工名処之人たのう
こみほとの秋ハ来まうり庭の露
しくたくせ男の老てんくらり

くんすゝめはさなくてこそ
かくれなき道もあされよ九月の段
こなたまゐ牛
鶏頭は茄子のかくれ用ひんや
蓮の飯たしもほそつのくすり椰
其為や霧のいのちの枕くれ
いつまでか秋ほん時より秋草　あまうき
しるのつる中は
やらさききて世ふあらぬ女御ぬ
ふのくとやこれもあつし楼のもと
いつくしみかしこまる宿さきのふ
眠獅もしかそのやくかりて

あつさやむかし絵の数は秋のまと
ひ松こしらえ道つつのみ
うほこ世やとかくいれしあそふるみ
しせとうさきからせきさや毎年毎とし
門は動の墓はましてそ
いせうこひれうしてもけきまちておね
壁こし世物いひふれきく道のれ
十月やしくの世帯子　女
十月や戸塚の鼻れ宇治の錦　散
青施大旦か純年はありて
志そくれ世をのつ道くりゆき鮮
松と明しいてくはしあけぬるかな

[illegible]狂言の時門人寅[illegible]

[illegible]

[illegible]の松

[illegible]や[illegible]滝水響三千里

白糸[illegible]陸石せ[illegible]時

毛の三[illegible]動上[illegible]見[illegible]義[illegible]し

孫[illegible]

金[illegible]

初雪や[illegible]降る[illegible]

[illegible]

貪

[illegible]人の[illegible]

白糸[illegible]

大橋

大晦日時[illegible]花[illegible]

歌の[illegible]

[illegible]

時白河さ[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花さくやきさらぎ露の玉たすき

四の附合

世にふるもさらに時雨のやどり哉　宗祇

世にふるもさらに宗祇のやどり哉　はせを

よにふるもさらに世をせばめぬ哉　破笠

身のほどは志ぐれにゝたや破笠　白猿

文月の比江の嶋に女くしと六を
いろいろまいてとひく

芝居も又筆あやまりの汗の所ひまあり

五年ちよなかりける除数

とし丸豆大ゝゝくゝゝにゝ口ゝ〻〻まゝり

八王子市ゝある人

京傳と聞中川あそびおもしろき
しかされける遊せん

こゝろよしとおもふ武蔵野
四方和歌によく

蘆やみちにちるこゝろし鯉のこゝろ
とゆゑんれハ

ちかくてよせける君かこゝろはら
こゝろせる筆延ぬし帝中の
風子ちきとひとゝふうまく
君まくりゝゝとき

武蔵野におき所なき露の身を
と志あきらけ遠さん

書しハ武江州の五百崎

白猿蔑句集 終

白猿ひとりごと

このごろかくともなしたいふし二世斗
まありおかる此人々にすへき物ならねハ
ねハふるくよりかくし置たるとしつの句あまた
なるをもれうちあきたらんハいさゝ志けれ
あく飛りまゝ今さら思ひ出て書
はじめんもてつかしけれハそのまゝうち
おきぬるを此頃ふつきはいくの件より
こひして無理にも乞ひとり出てとこれ
とも上つへきたあつれとある人のこひ
まゝあのくつまゝ其の世てどこかへ分れと
此書に附録となしね

人のかくやきさにさしの所よりのきとち
あまりてつとひく酒くそうりつどよみ無
してもつれあひ乱ろうほよいてあぎれさ
ときみうりつりつて入ぬれいてあく
泳きてるさ女しそ俄よひぎなんえうて
ろひまあちそるそれいひきまきひつて
げくとけ歩こくしいうてきそるよとえて
さ泳きこうちせそ当くくよいう女やて
ぬくるにつちくくも老ふくてき物くを
たりひつけられしう
○そうふれそつうりたけて小袖あん
とのほうとうくむきれたあり時其ふ

あるもたくしあがちよふぎ仏後の時めく比ふ
りくきふ古代ばけうちおそおそおそ
迫されくふぐちをうふれ時其はけくうう
かりうやくうそあてちる代きひてくきに
たつれどとのさうふたのひてそむづられ
○その分恨のほとくくとも去て許度れ度
あくふ何ぞ文なとよびて声うちやあ
まふこるきるどく 群ちくげてほふ
らきふおのれうる身のいやしき物ふきぬ
をくくのふるまひふ者くり
○正直ふ一旦其えくてあくとくくも孫其
日月の情和蒙くずとこうえくくん其

物事にまぎれつゝ
○ある者昼のまゝまどろみてゐたりけるに
まるゝ飛びくれはせのうへにとまりけ
りこれ海邪なりまたよしなしとぞ
○術井何とかいふ盲人のみ祈りまうすとて
さゝもれて法師はあるよ眼成祈りとる物
をもたにとくかくいきたりきをといひくれた
盲人こゝにてまもこてすてゝ眼ぬ物をふ
たゝあるかのそれこゝてみるやといしは
ぬ知りは西答ちあるき
○卯月のまつ一両中にふるゝ陸合
戦といつもよりはなり田の面より陸あるゝ

あつまりて花ちりひあつまるさるをさくてゝ
後ひすゝ里へのらくふ先は陸れめとが
時成えゝくぐちあると何りはう合戦すとふ
ぬ出りんとうきこてゝもうさもあ物
へくおそらく
○武蔵金沢の能見堂とは唐の西湖より似よし
ゝて其は寺和の更あつく堂供寺面
堂成守ゝ陸岩坊物ゝうせ
手たりつよ対堂のみいつゝ能化堂とや
ゝひゝ地義院ゝて堂のゝに
守海の作は大石の地義そあ置ま
まもゝもつゝ堂とは後のゝ人乃投ま

まゝてよひろんそうひろまゝうれゝすゝ

○岸よ遊つゝ栄ハいきゝの毋と立居ゝ
きゝりゝの腸の細きハ痩のまゝ居ゝ
ぬゝや門牛れおのゝ舎人ゝあゝくハ米ゝ
こゝひゝ死きゝひぬゝれまゝこれむゝゝ
ろひゝきゝもきゝハ海とかきゝ古墓ゝあ
といゝをゝ

○鳥ゝ居清信といゝ絵師の祖父柏延の絵
ゝ遠方のかゝよゝのきたるゝ人乃持まゝて
これゝ物のきゝよゝひゝゝ毋
如何祖父西未意庭前柏延士
市川五祖ゝの白猿書とかゝゝきうハあ

○八月の比ゝ大の八堺屋なゝ三ゝ祖父
の自筆ゝ屏風ゝ
ゝ山やのゝ
ゝゝあゝ
ちゝぬゝを樹ゝ乃てゝゝ

○あゝのゝおきゝるゝ時ゝゝ
ゝゝのゝ
物ゝ毒もゝゝゝ
人ゝゝゝ
ゝゝれゝ
ゝは人ゝゝ
ゝ

うたがはきこゝろいまゝ考へ
○めつらかなることのひとつにて一間よきて
みてたに行とうらいまゝ見てゝ人間一生の
食物八天たうらけえて生まれ八大食
迷はたまゝ生分量ばくひたゝまゝ故
命うかつたもむへゝ云時まゝ猫う
迷ハいかさに八命八食まあるとい
た大食ゝくゝひてをかゝまれとゝた
あゝそひあゝゝ迷ちむはれゝ世まゝ月
ゝ寿城長迷と論せゝゝいるひきゝ
まきゝてゝゝやひゝあゝひあゝ
○させを義の白まゝ猫さゝ埃も真る笠の

上ゝいゝあゝ山白ちうあも感てはゝ
虚ばかりゝ実はゝと感せもるゝと凡人のつぎ
あゝば仏陀ゝゝゝゝゝむ丑八立尾ゝ生雷う
上あゝゝゝてゝきたゝとゝゝ我祖父と
有ゝとやあゝふゝ寺ん
○雪中菴のあゝとやつゝとばゝけゝ利を
こゝひゝゝ謝仏陀百負いつもぬきんば
たゝ白ゝゝのばてゝあゝゝその白のまゝ白
何ゝできゝもばたの八相とあゝゝゝ
ゝばゝゝさゝゝ上ばゝあゝとゝ寺たゝ
ゝ迷をぬきこのゝゝゝゝ仏陀の丈
将要年ゝ房京陸ゝゝゝ迷ゝ出あゝぬ

○妻は此人あつまりてさまざまの
類成こそそそて子百とかきて硯を
日はもすとうく大きたきたく成てんそん
じてあるぬちの人の不審ちるたりちし
さこかしさらもさぐかりみ有題のさ面ふく
付り子日（しのたまり）という題ようをいこの物ゝ大浮よの点
のもくいくのひりん共成よりかちてんま
論語者ひくくまし中庸よりやとくいて
ましさくあきてれがるこきなれば
とくかりらちふりて出やきくしろを
人どもくひあて
白張切とくさと終

寛政丁巳春三月

十日亭雨宵家書

市川白猿者以俳優世其家凡梨園子弟不言生旦丑淨無出於白猿之右者於其扮戲之妙也世人所知今不贅爲性寡欲愛閒靜好倡諧詼狂歌身居戲場之中心在山水之間每有暇則諷花詠月造意之奇措辭之妙無愧于世實足驚人矣予移居田間七換星霜不見生亦久矣頃日邂

逅於墨水濵生出一書示予予觀之篇辭流麗詞旨清婉愈讀愈快因謂之曰嗚呼名下無虛士者真子之謂也此一冊子録以行於世可也生曰已調不足備大方之觀固辭予曰否生之雅尚風流人之所艶稱也不必辭遂囑耕書堂主人上梓焉生常所唫詠不設稿偶所筆記經年散亡一

無存者。此書也。生之所諳記。實千百
中之一二。已。末篇有獨語一卷。昔日
為人所奪。不知所在。附録于茲者。所
得於反古堆中云。寛政八丙辰十
二月。白猿歳五十六。辭勾闌隱居于
武州葛飾郡須崎村。柴門松戸。三徑
一室。葛巾野服。赤米白鹽。以為足養。
老吁。清標玉立。實神僊中之人哉。生

幼名幸藏。長稱幸四郎。後稱市川團
十郎。晩稱鰕藏。白猿其表德也。丁巳
夏四月。五老山人題于六樹園。

江戸通油町
蔦屋重三郎 板

昌平坂學問所

夏四月五日入山入鹿千六樹園

十四日繁雨雜霰自然其未新夢少下

終日幸藏見雜書四庫全書中三園